

本稿は、エスニックマイノリティに対する福祉援助について、アメリカにおけるマイノリティへの社会福祉実践の具体例を取り上げ、その意義と課題を論じようとしたものである。わが国においては、このようなマイノリティに関する研究自体がそれほど多くはなされていないので、本稿はこのテーマに関する基礎的な研究と成り得るであろう。また、筆者は、アメリカモンタナ州にある Montana Asian-American Centerまで足を運び、ヒアリング調査を行ったが、研究に対するその意欲的な姿勢には敬意を表する。

本稿の前半部分は、まず、エスニックマイノリティに対する社会福祉のアプローチを、歴史的な視点から文化的欠陥論、マイノリティ論、民族文化論の3つに大別し、各アプローチの社会背景やその特徴を論じている。次に、アメリカにおけるマイノリティへの社会福祉実践を、マジョリティとマイノリティとの複合チームによるサービス提供、マイノリティによるサービス提供の2つに分け、サービス提供サイドの視点から、その現状と課題を考察している。本稿の後半部分では、筆者は、当事者であるマイノリティ自らが主体となってサービスを提供する、マイノリティによるサービス提供に特に焦点をあて、Montana Asian-American Centerの実践例を取り上げ、その意義を論じている。

「論評」という趣旨からは若干反れるかもしれないが、論評者(石川)は、1997年9月から1年間、ロスアンゼルスに留学していたが、その留学中、リトル東京にあるリトル東京サービスセンターでのソーシャルワーク実践を見学したり、自身でボランティア活動を行った。本稿の内容は、論評者がその時に自らも経験したマイノリティ問題や、実際にみたマイノリティへの社会福祉援助活動とかなり合致している。この点においては本稿は、非常に実践的な論文とも言えよう。

ただし、検討が必要な課題がいくつかみられたが、ここでは2点に絞り、それらについて書かせて頂く。まず、マイノリティへの援助にかかわる立場についてであるが、筆者は「エスニックマイノリティへの社会福祉実践をみたとき、そこには大きな異なる2つの立場がみられる」と指摘している。筆者は、どれだけの実践を分析して、このような結論を導き出したのか詳しい説明がほしかったところである。また、複合チームによるサービス提供とマイノリティによるサービス提供が「大きな異なる立場」となっているかどうかは疑問の残るところである。筆者自身も指摘しているように、マイノリティへの援助の歴史的変遷は、アメリカ社会の流れが背景にあり、その時代の流れの中で、また時代の流れに応じて、様々な形に変遷してきたと考えることもできるのではなからうか。

次に、筆者は、エスニックマイノリティへの支援活動の実践例として、MAACの活動を取り上げ、それらを紹介し、その意義について論じている。率直な感想としては、活動内容とその後に続く意義との間のつながりがよくわからなく、物足りなかった。もう少し踏み込んだ考察が必要であった。さらに、本稿には、基本的に、考察の部分が欠けているように思える。もし、「マイノリティによるサービス提供の意義」というように、一般化して論じるのであれば、MAACの一事例からそれをどのように展開していけばよいのか、一般化するために必要な要素、問題点や課題などを論じるべきであった。

筆者がこれらの課題を踏まえ、今後、研究を大いに発展されるように期待したい。